

## モード2の脚注解説案

以下の文案をもとにして、さらに刈り込んでいただいてかまいません。よろしくお願ひします。

### モード2（短いバージョン）

特定のディシプリンの中でその発展の道筋に沿って推進される研究活動の様式をモード1という。一方、社会的課題解決のための活動を推進するためには、幅広い多様なディシプリンからの知的貢献や対象に関する多面的な知識が必要になる。このように、多様なディシプリンが協働して推進（この性質をトランスディシプリナリという）する知的活動の様式をモード2という。現代社会では知識を活用して課題解決にあたる場面が増えている。そのような社会に浸透した知的活動に見られる特徴がモード2である。大学教育も伝統的な学問分野の人材育成のみならず、トランスディシプリナリな教育を通じて多様な社会的課題へ臨んでいる。本提言では、そのような非伝統的な人材育成をモード2教育と呼ぶ。

参考：Gibbons, M., Limonges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., Trow, M. 1994（小林信一監訳『現代社会と知の創造』丸善，1997）

### モード2（長いバージョン）

ディシプリン (discipline) は知識の体系を中心に構築される学問領域であり、特定のディシプリンの発展の道筋に沿って推進される研究活動の様式をモード1という。これに対して、産業界を含めて現実社会に現れる課題のほとんどは、それが精神的、社会的なものであれ、自然に関するものであれ、特定のディシプリンの発展の道筋とは関係なく現れる。そのため、現実社会の課題を対象とする課題解決指向の研究活動や探求活動の推進のためは、多くの場合、幅広い多様なディシプリンからの知的貢献や、場合によっては対象に関する多面的な知識が必要になる。このようにして推進される研究活動や探求活動の様式をモード2という。モード2の多様なディシプリンが協働して研究活動を推進する性質を超領域的または学融合的 (transdisciplinary) と言う。モード1、モード2は、学問の分類ではなく、知識の活用様式の違いを表している。

知識基盤社会と呼ばれるように、現代社会では、経済活動のみならず、さまざまな活動において知識を活用して課題解決にあたることが必要になっている。

そのような社会に浸透した知的活動の様式の特徴がモード2である。そのような社会のあり方を反映して、大学教育も伝統的な学問分野の人材育成のみならず、トランスディシプリナリな教育を通じて多面性を持つ社会的課題に対応する人材育成に臨みつつある。本提言では、そのような非伝統的な大学教育や人材育成をモード2教育と呼ぶ。

参考：Gibbons, M., Limonges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., Trow, M. 1994（小林信一監訳『現代社会と知の創造』丸善，1997）

以下は追加の解説ですので本文とは関係ありません

## 2. 専攻分野名称の多様化について

元来は、「学士の上に冠してその種別を示す名称は原則としてその出身学部名によるものとする」（注2）とされていたのであったが、・・・

注2）「大学基準」（昭和22年、大学基準協会決定）による。この「大学基準」が旧文部省に移管されて「大学設置基準」となった。

に関して、、、

事実関係としてはこれでよいが、歴史的に期限を辿ると、、、

東京大学が明治10年に設立され、翌11年には文部省から学位授与権が与えられ（この段階では学位としては学士のみ）、12年に東京大学は授与する学士号を法学士・理学士・文学士・医学士・製薬士としたが、これは出身学部の名称を学士号の上に冠したものであった（ただし、医学部出身でも製薬学科のみは製薬士とした）。もっとも、この段階では学位令はなく、明治20年に学位令が交付された段階で、学士は学位から除かれることになり、単なる称号になった。

したがって、基準協会の「学士の上に冠してその種別を示す名称は原則としてその出身学部名による」は東京大学設立直後からの慣行であったと思われます。